

私のはんせい記

～「改修設計」事始め～

建築家 三木 哲

● 1995年1月19日

1995年1月19日、未明、午前5時、淡路島北淡町から、神戸市街を貫き西宮市、宝塚市に至る野島断層が動き、近代都市神戸に壊滅的な被害が発生した。震源は明石海峡、東西方向に圧力軸を持つ横ずれ断層型に動く都市直下型の断層地震でマグニチュード7.3、818ガル、死者6434人、最大震度7の被災の帯が神戸市内を縦断した。

当日は布団の中で揺れを感じたが、再び寝てしまい起床後、テレビをつけると、神戸の街を上空のヘリコプターから映した衝撃的な映像が放映されていた。

高架の高速道路が横倒しになり、道路沿いに無傷と思われるマンションが建っていた。

高架橋の一部が倒壊し、残された高速道路上に大型バスが吊りになっていた。

新幹線もJR在来線も、阪神電車、阪急電車も高架の線路はうねり運航停止していた。

街には、いく筋も火災の火の手と黒煙が上がっていた。倒壊したと思われるビルから火の手が上がっている映像からは、消火活動の様子はなかった。

社会党と自民党・新党さきがけ連立内閣の村山富市総理大臣が、燃え上がる神戸の街の映像を見て空から放水できないかと指示するとの報道が流された。

燃え盛る木造密集地域の映像に対して、消火活動は全く行われていないように見えた。

今、あそこでは何が起きているのであろう。

その日は事務所に出勤せず、一日中テレビの前で実況映像に釘付けになっていた。

とんでもないことが起きている。

50歳を超えた私が今まで経験したことがない風景がそこにあった。

報道によると、神戸の街の直下を横断する野島断層という断層があること。この断層がわずか15秒間ほど、動き、震度7の巨大地震が発生した事。高架の高速道路や鉄道線路などの都市インフラと土木工作物が倒壊するなどして被害が出ていること。木造家屋が多く建つ木造密集地域で火災が発生し消火活動が追い付かない状態にあること。などがわかってきた。

1月19日と言えば、26年前の1969年のこの日、東大・安田講堂のバリケード封鎖が機動隊によって解除された日に当たる。

60年安保闘争以降の日本の大衆運動が終焉する象徴



震度7の地域 50km



当日の神戸市内の映像

的な日であった。

高度経済成長期から世界の資金が日本に集中したバブル経済が崩壊し、現代都市・神戸は直下型地震による火災をくいとめることが出来ず、ただ燃えるに任せる状態にあった。

その時映像を見ながら、一つの時代が終わろうとしていることを感じていた。

私にとって「巨大地震」「直下型地震」「活断層」「被災の帯」「都市災害」「戦後日本の建築基準法体系の問題点」「土木と建築の耐震性」「都市ライフラインの耐震性」「耐震設計基準」「木造密集地域」などなど、新たに勉強し、考え直さなければならない課題が見えてきた。

ともかく一刻も早く、神戸の被災地に行ってみよう。

この阪神大震災は、2011年3月に発生する東日本大震災とは様相を異にする。

東日本大震災はマグニチュード9.0の巨大海溝型地震で、日本海溝の地盤の跳ね上がりにより引き起こされた巨大津波による被害が大きかったが、土木・建築物の地震被害は比較的少なかった。

一方、阪神大震災はマグニチュード7.3で、地震エネルギーは比較的に小さかったものの、震源域が都市直下型であるがゆえに都市建造物に対する地震の破壊力と被害ははるかに大きく、建築の耐震性に関しては大きな教訓を残した。

みき・てつ

(有)共同設計・五月社一級建築士事務所顧問。1943年生まれ。建築家がメンテナンスを手がけることなど考えられなかった時代から「改修」に携わり、30年以上にわたって同分野を開拓し続けてきたバイオニア。